

「暇そう」「おせっかい」医師

がん患者の相談のります

診断や診療は一切なし。カルテも書かず、患者のデータも見ない——。医師が、がん患者や家族の悩みや不安に耳を傾けて心を癒やす「がん哲学外来」。福井市や金沢市の病院で開かれるなど北陸でも広がりがつつある。金沢市では今後、市内にある3病院の医師らが中心となり、持ち回りで実施する予定だ。

24日、金沢で「がん哲学外来」

順天堂大医学部の樋野興夫教授(病理・腫瘍学)が「専門家による患者の悩みや不安を聞く場が必要ではないか」と2008年に設けた。キャンセル待ちが出るほどの反響があり、各地

の病院に広がった。相談を受ける医師はすべてボランティアで、患者の負担はゼロ。これまでに首都圏を中心に開かれてきたが、北陸では福井県済生会病院(福井市)が昨年6月に新設し、年2〜3回開いてきた。

相談を受ける医師に求められるのが、「暇げな風貌」と「偉大なおせっかい」。

患者は忙しそうにしてい



「がん哲学外来」相談員の認定証を持つ金沢医療センターの竹川茂医師



金沢市で開かれた樋野興夫教授の講演会。患者や医療関係者ら100人が参加した

る医師にはなかなか悩みを打ち明けにくい。まずは話をしやすい雰囲気づくりが必要という。「偉大なおせっかい」は、自分の考えを押しつけずに患者に共感することの大切さを意味している。

県内では今年2月、金沢医療センター、金沢赤十字病院、金沢大付属病院の医師計3人が樋野教授から相談員の「認定証」を受け、4月に金沢赤十字病院で県内初となる「がん哲学外来」を開いた。

そのうちの1人、金沢医療センターの竹川茂外科医長(53)は「患者さんと対話する時間が必要だと考えた」と話す。通常の診察では、多くの患者を抱えているので時間に限りがある。日頃、診察をしながら「患者さんは相談したいが、速慮しているのでは」と感じていた。そんなとき、樋野教授のブログを通じて哲学外来の存在を知ったという。「受診をきっかけに患者さんが前向きに考える手助けができれば」

6月上旬、樋野教授を招いた講演会と哲学外来が金沢医療センターで開かれた。約1時間あまり「受診した金沢市に住むがん患者の50代女性は「家族についての悩みなどを聞いてもらった。今後は『誰か人のために前向きに生きる』とが大切」という話が印象に残った」と振り返った。

金沢での取り組みについて、樋野教授は「地域の大きな病院が持ち回りで開催するのは全国でも例がない。地元のがん患者さんが気軽に安心して相談できるので「はないか」と期待を寄せ

◇ 24日正午〜午後4時半、金沢市青草町の近江町交流プラザで開かれる食や排泄について考えるイベント「生きるセンス・食べるセンス・出すセンス」(NPO日本コンチネンス協会北陸支部主催)の会場で「がん哲学外来」が開かれる。事前予約が必要。申し込みは住所、氏名、連絡先を明記し、協会北陸支部事務局へ、メール(sakaki-1@tvk.ne.jp)かファクス(0761・21・2395)で。(井瀧亮弘)